

教育センターだより

第30号 (昭和58年3月)

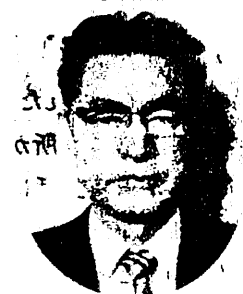


目 次

巻頭言 山頂を「かすか」に見て……………	1
昭和57年度秋田県教育センター 所員研究発表の概要……………	2
第17回全県児童・生徒理科研究発表大会……………	4
昭和57年度刊行物の案内……………	6
昭和57年度教育センター関係全国研究 協議会(秋田大会)から……………	7
昭和58年度研修講座計画……………	8
随時研修実施状況……………	8

山頂を「かすか」に見て

科学技術研究部長 山本陽一



昨年四月から当教育センターに勤めて2か月余り、秋田市の生活にも新しい職務にもようやく慣れた七月上旬、高山植物と

地質の見学を兼ねた早池峰山(北上山地・標高1914m)登山に加わる。島山陽一指導主事(早池峰登山歴70回)をリーダーとする所員一行6名である。ここ数年高校の教頭として山登りを試みるゆとりもなかった私にとって久しぶりの登山であった。

早朝、山麓(標高約1000m)まで車で行き岩肌の露出する急崖の南面から登ることになった。約3分の1くらい登ったであろうか。早くも疲れが襲い足が言うことを聞かない。落こしようとも考えた。しかし一行のなかに私より10歳も先輩の鈴木秀治氏(元校長・現特殊教育センター勤務)が悠々と登っているのを見て発奮、懸命に足を運んだ。その頃から高山植物も数や種類を増し、かんらん岩や蛇紋岩の露出も見られるようになった。昨夜の深酒もようやくさめ、足の方も昔を思い出してくれ、なんとか頂上に達した。高山植物に全く無知であった私もハヤチネウスユキソウ・ミヤマズマギクなど数種の見分けがつくようになった。

南方にはなだらかな綾線がくっきりと浮かんだ山脈が見える。山麓の崖には「まさ」(花崗岩の風化した砂)が堆積しており、岩質は花崗閃緑岩であろう。植生も早池峰山とは全く異なるようである。だれが名付けたか薬師岳、ほんとうに病人ならずとも心がなごむ

思いのする山容である。今回は薬師岳を目指すことを約し、楽しく有益な週末登山の帰路についた。

私たちの励む学問の道もよく山登りに例えることが多い。科学技術の分野においても宇宙・地球・海洋・気象・光・エネルギー・素粒子・コンピューター・遺伝子・人間の未来などがあり進歩も著しい。第一線の研究者を頂点に、これを支えてアマチュアをふくむ多くの人々が底辺をなしている。

この二月の始め当教育センターでも所員研究発表会を催し、各研究室より11名の所員がその研究の成果を問い、230名を超える参会者を得、好評のうちにそれぞれの責を果たすことができた。このことは各学校をはじめ教育関係者の皆さんの研究と研修に対するなみなみならぬ熱意と意欲のあらわれであり、私たちを勇気付けた。

いま学界・教育界の第一線で活躍しておられる方々は、どんな方向を目指し、どんな研究をしているのか。また学校では先生方が、どんな悩みをもち、何を必要としているかを見極め、山登りに例えれば山頂を「かすか」に望みながら、おのれの登る道を見い出すことができればと思っている。

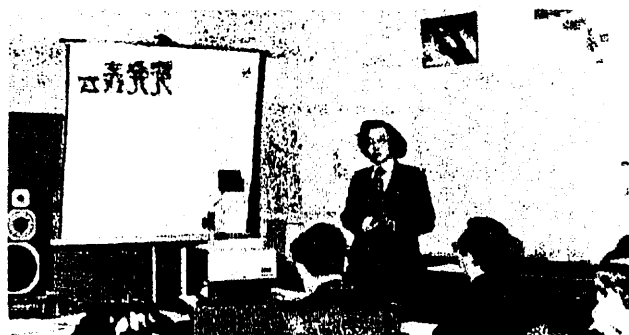
教育の仕事は、つまるところ、おのれ自身は山頂を極めなくとも、山腹や山裾を登りつつ、「かすか」に見える山頂を目指すタフな心身を持つ若者を、一人でも多く育てるのがその使命ではなかろうか。

昭和57年度 秋田県教育センター所員研究発表の概要

今年度の所員研究発表会は、県内教職関係者240名を迎え、2月3日当教育センターで開催された。

11名の所員が、学校経営・教科学習指導・特殊教育・生徒指導等について、日ごろ研究した成果を発表し、活発な意見交換がなされた。

以下は、当日の発表テーマと内容の概要を紹介したものであるが、後日この論文を掲載した「研究紀要第14集」が刊行されるので、活用をお願いしたい。



教育工学的手法を取り入れた学習指導の改善

—教育工学的手法の導入に対する関心度について—

—教育工学研究室 室長 高橋富美雄—

小・中学校では「新教材基準」に従い、教育機器の導入と充実に努めている。教育機器の導入について重要なことは、それらの機器が、日常の学習指導の場で、どのように利用され、効果的に生かされているかどうかということである。つまり、機器を使う教師の学習指導に対する構え、教育工学的考え方や手法に関する知識・技能が大事なポイントになる。

これらのことから、教育機器の利用、教育工学的手法による学習指導、教師の指導観とTV・VTR、OHPの利用の3つの面について、関心や態度を調査し、学習指導改善への手がかりや問題点を究明する資料としたいと考え、分析と考察を試みたものである。

学校経営の改善に関する研究

—本県における教職員研修の実態と考察—

—経営研究室 指導主事 森谷裕二—

本県では、教職員研修の充実と体系化が重要な課題の一つとなっている。そこで、校内研修の実態や現行の教職員研修に対する意識などを調査し、県の施策に資料を供するとともに、研修の在り方を検討することにした。

調査として、① 校長を対象とするもの～校内研修の実態、校外研修への意識、現行の県教職員研修に対する意見や要望、校長にとって必要な研修の各項目を、② 教員を対象とするもの～現在必要と思う研修内容を、③ 市町村教育委員会を対象とするもの～昭和57年度実施の研修講座・講習会等の名称、対象、参加者数を、それぞれ調査し考察を加えた。

実験・実習学習を効果的に進めるための工夫

—高等学校家庭一般(食生活の設計・調理)について—

—技術家庭研究室 指導主事 小松玲子—

家庭科では「総授業時数の10分の5以上を実験・実習に充てる」として実験・実習の時数が明確にされた。しかし具体的な内容については教師の裁量に負う所が多い。そこで生徒が興味関心を持ち、しかも実生活に生かせる実験・実習に焦点を当て次の研究を試みた。

1. 教科書における実験・実習題材の調査と考察
2. 家庭一般における実験・実習の基準と整理
3. 実験書の検討
4. 実験・実習を効果的に進めるための工夫
 - (1) 理論学習を効果的に進めるための実験
 - (2) 新食品や社会的に関心の高い食品の実験・実習
 - (3) 便利な調理用具を使い、調理操作の簡単な実習

サウンド・スカルプチャーと造形の研究

—工作・工芸学習における教材化について—

—教科研究室 研究員 工藤周—

「飾って音の出る物」「使って音の出る物」、それぞれ用途に応じて、音の世界が広がっていく。子供一人ひとりが、一つの素材を手にして、たたいてみて、こすってみて、振ってみて、はじいてみて、そして吹いてみたりすると、そこにはいろいろな音の世界がある。そのような遊びの中に、造形要素を見い出していくことも一つの方法ではないだろうか。

「音が出る」ということは、「空気の振動」ではあるが、各種の素材を通して、音の出る仕組みを考えてみたとき、学年に応じた造形要素があることに気づく。小学校から中学校までの工作・工芸学習の一分野として、「音の出るおもちゃ」の教材化を試みた。

秋田県岩城町に産するマンガノジュールの地学的意義

理科研究室 指導主事 鎌田 武美

地学教育の地域性を生かした野外観察において学習効果を一層高める要因の一つとして現代性に富む素材に着目した。現在、最も注目されている現世のマンガノジュールと類似したものが本県の岩城町の地層から産する。そこで、この岩城町産マンガノジュールを含む権現山層の地層を明らかにするとともに、マンガノジュールの産状や形態を調べ、化学分析を行った。特に、化学分析の結果と現世のマンガノジュールを比較し、その特性について検討した。

その結果、岩城町産マンガノジュールの生成の背景には時間的・空間的な広がりがあり、郷土の地層を学習するのに有効な一素材であることが分かった。高校地学学習の教材化についてもその概要を検討した。

高等学校音楽科における鑑賞指導の改善に関する研究

— 現代邦楽の取り扱いを中心に —

教科研究室 指導主事 伊藤 吉雄

邦楽器（箏、尺八、三味線、琵琶、など）を使った現代的作品である「現代邦楽」は、作曲家の現代的表現法と邦楽演奏家の豊かな演奏技術がかもし出す音楽である。高等学校の音楽指導において、特に日本の音楽の指導には、幅広い音楽的視野に立った指導が強調されている。そこで、調査のねらいを設定し、研究仮説を立てて、考察を加えた。

〔調査のねらい〕①音楽担当者対象に「邦楽指導の実態」②生徒対象に「現代邦楽についてのイメージ」

〔研究仮説〕①現代邦楽は作品によってイメージに違いがあるのではないかと。②洋楽系作曲家と邦楽系作曲家の作品においてイメージに違いがあるのではないかと。

— 教育研究法委員会 —

「観点別学習状況の評価」の進め方

教科研究室 室長 石郷岡 元

小・中学校児童・生徒指導要録の改訂に伴い、新たに「観点別学習状況」の欄が設けられ、その評価の取り扱いが、大きな問題となっている。

そこで、当教育センターではプロジェクトチーム（教育評価研究委員会）を編成し、理論と実際の両面からこれを研究し、学校における指導と評価の一体化に資

するため、今年度「観点別学習状況の評価」の進め方（仮称）の刊行を計画している。

その内容としては、

I 指導要録と観点別学習状況の評価

- 1 指導要録改訂の背景
- 2 指導要録と観点別学習状況

II 観点別学習状況の評価

- 1 達成目標と観点別学習状況の評価
- 2 観点別学習状況の評価の実際
- 3 達成目標の設定
- 4 評価基準の設定
- 5 評価計画の考え方
- 6 達成状況の判定
- 7 関心・態度の評価

III 観点別学習状況の評価の手順

- 1 目標分析の仕方
- 2 達成基準表
- 3 評価基準表
- 4 評価計画の手順
- 5 評価問題作成の手順
- 6 達成状況の判定の方法

IV 研究実践校の紹介

- 1 仁賀保町立平沢小学校
- 2 大館市立大館第一中学校
- 3 秋田大学教育学部附属中学校（数学科）

なお、次年度は、「観点別学習状況の評価」の実際（仮称）の刊行を予定している。

以上が計画の概要であるが、年次に従い、学校、教育機関からの要望にも十分配慮しながら、研究を進めていきたい。

特殊教育センター関係の研究発表は、次のようなテーマで行われた。

「いわゆる家庭内乱暴における親子関係についての一考察— 発生の遠因と近因 —」

研究員 田山 久

「登校拒否児をもつ親の変容過程に関する一考察— 母親との面接を通して —」

研究員 草 弼 稔

「重度の精神発達遅滞児のコミュニケーション形成に関する研究」 研究員 西山 登喜雄
「言語発達遅滞児に対するリズム療法の適用について」 研究員 高橋 恒 治

特に今回は、生徒指導上の当面する課題を解明しようとする研究が発表されたこともあり、近來にない盛会であった。

なお、研究発表の概要は「特殊教育センターだより」第3号に掲載する。また、論文は教育センター関係と同冊で研究紀要第14集に掲載されることになっている。

第17回全県児童・生徒理科研究発表大会

第17回全県児童生徒理科研究発表大会は、県教育研究会理科部会、県高等学校教育研究会理科部会との共催により、昨年11月2、4、5日の3日間にわたって、当教育センターを会場として開催された。

第1日は高等学校の部9題（8校）1会場、第2日は中学校の部40題（28校）4会場、第3日は小学校の部54題（39校）5会場、に分かれ、日頃の研究成果を発表し合った。さすがに地区の推薦を受けての発表だけに、鋭い着眼点が光る個人研究や、地域の自然に取り組んだグループ研究など、例年にも増して充実した内容の研究発表大会となった。

大会の趣旨は、児童生徒の研究活動の成果の発表を通して自主的な研究活動の向上を図り、広く研究のしかたを交換して学び方を学ぶ場を提供し、教室で学ぶことよりも一層深いものを会得させようとするところにある。また、科学の進歩発展に伴い生活環境が著しく変容する今日、悠久の自然とその変化に魅力を感じ観察考察を進めることが、人間性を豊かにする上でも意義深いものであることを確かめ合うねらいもある。更にまた、当センターにとっては年に一度、児童生徒父母の姿を通して学校現場の生吹きが感じられる大会になっている。

各会場とも2名（高校の会場では3名）の指導助言



（提供 鹿角理科センター 川島先生）

者を依頼し、研究発表の一つ一つに適切な指導助言を仰いだ。また、大会全体を通しての感想や意見を頂いたので要点をまとめ、次回の参考にしたい。

小学校では、①発表態度がよく、聴く側も活発な質問があって立派。②発表内容をよく理解し要点のまとめが非常によい。③予想や仮説の立て方がはっきりし何をどうまとめたかよく分かるものが多い。

中学校では、①教師の手を加えたものとそうでないものの違いがはっきりしている。適切な指導が必要。②テーマ設定を具体的にすれば研究手順がもっとよく分かるようになり、質疑応答も活発になる。③個人研究とグループ研究ではスケールが違う。それぞれの良さを大切にしたい。

高等学校では、①身近なものからテーマを見出している研究が多い。②高度な内容、専門的な用語など聴く側に理解できるような解説を望む。③同一テーマで全県に組織的研究活動呼びかけてはどうか。

小 学 校 の 部

- | | | | |
|----------------------|------|-----------------------|------|
| 1. モンシロチョウのかんさつ | 花輪小 | 16. アゲハチョウの観察 | 飯田川小 |
| 2. 野鳥を観察して | " | 17. カブト虫を育てて | 五城目小 |
| 3. カタツムリを育てて | " | 18. らっかせいをそだてて | 大湯小 |
| 4. お茶の色の変化 | 大湯小 | 19. 雪山のとけ方 | 八郎瀧小 |
| 5. 夕顔のかんさつ | 尾去沢小 | 20. ひなたとひかげのひまわりのかんさつ | 船川南小 |
| 6. 比内町の地形地質 | 八木橋小 | 21. シジュウガラを観察 | 脇本一小 |
| 7. サンショウウオを見つけた | 城南小 | 22. アゲハチョウの観察 | " |
| 8. 野草の根と葉のひろがり | " | 23. 布地の通気性の研究 | " |
| 9. タンパク質の研究 | 湊城二小 | 24. 台風の研究 | 船越小 |
| 10. 果物の酸の強さの研究 | " | 25. あさがおとほうせんかの観察 | 旭南小 |
| 11. 植物にふくまれるでんぷんの観察 | 埴川小 | 26. テントウムシのけんきゅう | 旭川小 |
| 12. 埴川地区にみられる化石の研究 | " | 27. 青いアサガオが早くさくわけ | 土崎南小 |
| 13. 小魚の習性の観察 | 二ツ井小 | 28. 布の染まり方とおち方 | 土崎小 |
| 14. アメンボの「ぬれない足」のひみつ | " | 29. 水の波の進み方 | 港北小 |
| 15. 花にくる虫 | 飯田川小 | 30. だんご虫とわらじ虫 | 旭北小 |

31. ザリガニの観察	鶴舞小	43. クロヤマアリの研究	横手北小
32. ぼくの天気予報	〃	44. 旭岡山にすむ虫たち	横手南小
33. トマトとジャガイモのつぎ木の研究	矢島小	45. トンボの目	〃
34. でんぶん調べ	新山小	46. 地下水と十文字町の地層	十文字一小
35. 土の研究	〃	47. カタツムリの観察	朝倉小
36. 新山団地の地層	〃	48. 漂白剤とよごれ	川西小
37. クワガタ虫の研究	大曲小	49. ありじごくの観察(その3)	湯沢東小
38. ヒメギフチョウの一生	〃	50. お天気しらべ	湯沢西小
39. ぼうしの涼しさについて	内小友小	51. すず虫の研究	〃
40. ヘチマのまきひげの観察(Ⅳ)	角間川小	52. かいこがのかんさつ	三関小
41. 除草剤のききめのあらわれ方	四ツ屋小	53. キアゲハの観察	山田小
42. カマキリの研究	金沢小	54. 山菜の研究	坊ヶ沢小

——— 中 学 校 の 部 ———

1. 土の中の小動物	小坂中	22. ワラジムシの反応の研究	仁賀保中
2. うずむしの生態と分布	鷹巢中	23. ヤナギの茎や根のでかたについて	大曲中
3. 水の浸透の研究(第3報)	能代一中	24. エンドウの発芽について	〃
4. 米代川のプランクトン調査	〃	25. 大曲市松倉地区に分布する地層と岩石について	〃
5. イネの生育研究	鶴形中	26. ヨウ素溶液の色の消え方について	大曲南中
6. 夏の天気観測	椿中	27. 郷土の地層とその構成物質の研究(4)	大曲西中
7. 突沸についての研究	船川中	28. 桧木内川本流の底生動物の分布	中仙中
8. 常緑樹と落葉樹の葉の違いについて	〃	29. 煙の流れる速さの研究	十文字中
9. カタバミの葉の研究	男鹿東中	30. 微生物の生態	雄物川中
10. マツバボタンの研究	〃	31. 塩化バリウムと硫酸銅の沈澱反応について	横手南中
11. 円筒型の強度	秋田西中	32. 郷土館の土壌動物(その4)	〃
12. 豊岩のガの研究	豊岩中	33. 浮沈子の上昇速度について	〃
13. 旭川の微生物	秋田東中	34. チョウの分布と環境	鳳中
14. 等面葉の気孔について	土崎中	35. 水溶液中のイオンの移動について	湯沢北中
15. 葉の色と光合成と色素	〃	36. ホーレン草の色素について	湯沢南中
16. プラナリアの走化性について	泉中	37. 学校付近の植物分布	〃
17. ゾウリムシの増減と他の微生物	本荘南中	38. 路肩の植物	〃
18. 海水電池の研究	本荘北中	39. 山田白山周辺の地層・断層について	山田中
19. 風力エネルギーの研究	〃	40. 稲川町の地質と飲料水について	稲川中
20. 石沢地区の水生生物と水質について	石沢中		
21. 紙の吸水性について	仁賀保中		

——— 高 等 学 校 の 部 ———

1. 県北地区にある三風穴の植物について	米内沢高	6. 秋田県産ハナゴケ科ハナゴケ属石蕊群の分布について	西仙北高
2. 細胞性粘菌の研究	秋田南高	7. 発光ダイオードについて(その2)	角館南高
3. 由利海岸の海藻の化学成分の研究第1報	本荘高	8. 田沢湖町大沼の調査	〃
4. トマトの水耕さし木繁殖におよぼす諸要因について	西目農高	9. 触媒による過酸化水素の分解反応	横手高
5. 由利地方におけるタブ林の分布について	仁賀保高		

昭 和 57 年 度 刊 行 物 の 案 内

教育研究資料件名目録 第XV集

図書資料室では、県内外の学校や教育研究機関と研究・調査物の交換を続けている。近年教育課程の改訂等により、いろいろな領域、分野の教育研究が全国的に高まり、全国から貴重な研究物が多数寄贈された。

また、県内の学校から研究紀要等の寄贈も大幅に増えてきている。昭和57年1月より12月末までに提供されたこれら多くの研究物を内容ごとに分類し、第XV集として刊行することになった。

件数2,113で昨年より330件の増加である。ページ数では、26ページ多くなっている。特に研究内容で多くの件数がみられるのは、

- (1) F 4 - 01 教育測定・評価
- (2) F 8 - 01 生活指導・生徒指導
- (3) I 1 特殊教育

である。現在強く要望され、かつ研究されなければならない領域である。

県内外の教育動静および研究の方向を知る資料として、この目録が活用されるよう期待したい。

昨年まで学習指導ソフトウェア件名目録を別に発行していたが、件名目録の総合性を考えて、今回の教育研究資料件名目録第XV集にあわせて刊行することになった。

児童生徒一人ひとりに確かな学力を習得させるためには、細かな目標分析と効率的な授業計画を立てる必要がある。教育学研究室が担当している講座や研修会等で、県内の教職員が実践を通して提出された学習指導プログラムをはじめ、学習シート、ビデオテープ等のソフトウェアを集録した。学習指導法改善のために活用を期待したい。

なお、図書資料室には教育図書6,171冊、月刊雑誌62種が備えつけられており、これらの活用もお願いしたい。

「観点別学習状況の評価」の進め方

この概要については、前ページの「所員研究発表の概要」の欄に記されている。

高等学校「理科I実験観察カード」第2集

学習指導要領の改訂によって、高等学校に必修科目として新設された「理科I」は、国民的教養として必要な自然科学の基礎的・基本的知識の定着、身近な自然現象の観察や実験を通しての科学の方法の習得、自然についてのかたよりのない総合的な見方・考え方の育成などを主なねらいとしている。特に、その実施に当たっては、中・高の関連を重視し、観察、実験等の直接経験を通して学習が無理なく展開されることが求められている。

しかも、総合理科としての性格をもつ「理科I」においては、教師が自分の専攻分野以外の教材を指導する場面が多くなり、特に実験指導の面での負担が大きいたことが予想される。

このような情勢を十分考慮し、「理科I」の主な観察実験法を「理科I実験観察カード」にまとめて、各高等学校に配布することが計画され、「理科I」実施初年度の昨年第1集を発行した。

今年度はこれに続くものとして第2集を発行するはこびとなった。第2集は、第1集に掲載しきれなかった観察実験法や別法を紹介するとともに、実施する際の細かな留意点にも触れ、第1集同様授業に活用しやすい形式で編集を試みた。

特に第2集においては、身近な素材を活用することや、従来手薄とされてきた「人間と自然」の大項目に関する観察、実験の導入にも努めてみた。

主な内容は次の通りである。

- ① 力学的エネルギーの変換と保存
- ② 放物運動
- ③ 蛍光灯を利用した露光タイマー
- ④ 気体反応の法則（別法）
- ⑤ 身近な物質の成分元素
- ⑥ 分子量の測定
- ⑦ ヒメダカの発生観察
- ⑧ 酸素の生産と消費
- ⑨ 太陽放射熱
- ⑩ 大気の大循環（モデル実験）

授業の中で有効に活用されることを願っている。

高等学校社会科「現代社会」の研究

「現代社会」は、高等学校における新設の低学年必修科目であり、指導に当たっては新しい切り込み方が求められている。そこで、当教育センターでは県下の社会科担当の先生方と共に、この科目をどのように指導したらよいか研究を進めてきた。「高等学校社会科「現代社会」の研究」は、その研究の一端を報告するものである。

簡単に紹介すると、本書は次のような内容の学習指導資料である。

- (1) 社会科の変遷と「現代社会」の課題
- (2) 「現代社会」の年間指導計画例
- (3) 「現代社会」の授業展開例と身近な資料

また、本書は(3)の記述に重点を置いており、授業展開例を全部で20事例載せている。それぞれの事例には、小項目名・小項目の指導計画・学習の展開例〔①主題名・②ねらい・③指導過程（学習内容・学習活動・資料名・指導上の留意点）〕などを記述した。そして、生徒が身近で興味深く感じるであろうと思われる学習資料を精選し、その内容と出典とを示した。一例をあげると、主題「変わる地域社会」の場合、「人口急増躍動の町」「現代社会と都市化」「長時間通勤」「コミュニティ」（近所付きあいについて）の4つの学習資料が示されているが、それらは秋田魁新聞の記事・「都市化の地理」（古今書院）・「住宅貧乏物語」（岩波書店）・大曲青年会議所広域圏アンケート調査報告書をそれぞれ資料化したものである。

この学習指導資料が、各校の実態に応じて創造的に活用されることを期待したい。

研 究 紀 要 第14集

前掲で紹介した昭和57年度秋田県教育センター所員研究発表会に関する研究論文6編（経営1、教科2、理科1、技術家庭1、教育工学1）及び特殊教育センター関係（教育相談4）を収載したもので、3月下旬に刊行されることになっている。

研 修 集 録 第14集

今年度、5月から9月までの5か月間、当教育センター及び特殊教育センターで研修された、小学校4名、

中学校4名、高等学校2名、特殊教育学校1名、計11名の方々の研修成果をまとめたのがこの集録である。

研修テーマは、県の重点目標や学校現場の課題を踏まえており、勤労体験学習（経営・吉成）、学年経営及び小学校における生徒指導（経営・藤沢、教育相談・小山）、小学校・算数の関心態度（教科・高橋）、国語Ⅰの総合的性格（教科・泉谷）、学習の個別化をめざした地質教材（工学・那須）、生物暦の作成（理科・佐藤）、工業高校における理科Ⅰ（理科・阿部）、ⅠCの取り上げ方（技術・石川）、スカートの取り扱い（家庭・伊藤）、自閉児の指導（教育相談・鈴木）。それぞれが現場の実践につながる労作である。今後の指導に生かすよう、十分に活用いただきたい。

昭和57年度教育センター関係全国 研究協議会(秋田大会)から

全国理科教育センター 研究協議会初等理科部会

昭和57年9月7日～8日、千秋会館を会場に全国から69名の理科担当指導主事と文部省教科調査官奥井智久先生（講師）が参会し、本県がかかげた「初等理科の本質に迫る学習指導を充実させるにはどうしたらよいか」を研究主題にして、近來になく焦点化された研究発表、研究協議が行われた。

本研究協議会において、初等理科教育と発達課題の関連を追求していくことが、初等理科教育の本質に迫る方途であるということを導き出し得たことが大きな成果として評価された。

全国教育研究所連盟 国語・芸術研究協議会

昭和57年10月20日から22日までの3日間、標記の研究協議会が、「創造的な表現活動を育てる指導のあり方」をテーマに、北海道から沖縄にいたる都道府県から、約90名の参会者を集め、アキタパークホテルを会場に開催された。

全体会では、島山県教育長の教職員研修の重要性を強調した歓迎の言葉、秋田経済大学井上隆明教授の「秋田の物語素」と題するユニークな講演があった。

その後、国語・音楽・美術の各分科会にわかれ、研究発表・協議が行われ、今日的課題である表現力の向上・研修事業のあり方をめぐって論議がかわされた。

昭和58年度 研修講座計画

研修講座の計画に当たっては、学校教育にたずさわる教員の本来的な研修の在り方や新しい指導技術・経営方法等の変化への対応、県の目指す学校教育の方向、先生方の要望等を総合的にとらえ、研修の質的向上を図るように配慮した。

次年度は、このような基本方針にしたがって、研修講座の内容を精選し、より一層の充実を図るとともに、年次計画を明らかにし、講座の総合化へも努めていきたい。

1 主な新設講座について

(1) 研修指導者講座（小・中合同）

校内研修や地域の研修の改善・充実を図るために、研究（又は研修）主任を対象に新しい研修の在り方や進め方等について取り上げる。

(2) 小学校教育研修講座

小学校教育についての総合的な見地に立った研修として、各教科の指導内容や指導技術、各教科の関連、教育評価等の理論やそれらの具体的な実施法などを取り上げる。58年度は高学年担当者を対象としたが、今後中学年担当者や低学年担当者についても実施する計画である。

(3) 理科野外観察研修講座（小、希望研修講座）

従来以上に、自然を愛し、自然を理解することを重視している理科学習の中で、低学年から子供達に正しい自然観を身につけさせていくことは、理科教育の課題の一つである。下学年担当者を対象に、自然を総合的にみる野外観察の学習指導法とそれに必要な基礎的な知識・技能について取り上げる。

(4) マイクロコンピュータ研修講座（入門コース）

（小・中・高合同、希望研修講座）

多様化した情報化時代で、情報の処理の仕方は教育界においても関心事の一つである。新しい教育方法の一つとして、マイクロコンピュータの初歩的な知識や操作法について取り上げる。

2 「研修講座案内」等の配布と活用について

3月下旬に「研修講座案内」及び「希望研修講座の案内」のポスターを各校2部ずつ配布する。前向きの研修を大事にし、その実を上げたいと考えているので受講に際しては、これらの配布資料を十分御活用下さるようお願いしたい。なお、希望研修講座は所属長を通じて直接教育センター所長あてに申し込むことになっているので、積極的な参加を期待している（最終申込み期日は、各校種とも4月30日である）。



随時研修実施状況

今年度、当教育センター及び特殊教育センターを会場にしての随時研修は、9団体の申し込みがあり、延日数14日、対象人数 243名、延人数 381名に及ぶ多数の先生方が参加されました。

研修の内容も多岐にわたり、大館・比内・田代3地区の指導法の改善・指導プログラム作成、阿仁町教育研究所の教育工学的手法、比内町学校教育協の形成的評価、大曲市理科教育センターの理科教具製作、県特活研の自治性を助長する児童活動・生徒活動の指導のあり方、大館市特殊研の面接・観察指導、南秋特殊研の異常行動の発見と対処の仕方、県言語障害教育推進協の聴覚障害児教育研究者と現場担当者との協議、秋田市教委の心身障害児教育等でした。

今後も、支障のない限り、会場や講師を提供しますので「研修講座案内」を参照の上申し込み下さい。

編集後記

本号は、当センターで毎年行われている所員研究発表会、児童・生徒理科研究発表会の内容を中心に編集した。学校教育のあり方が厳しく問われている昨今である。各位の健闘を祈りつつ、第30号をお届けする。

教育センターだより 第30号

発行年月日 昭和58年3月1日

編集発行者 秋田県教育センター

秋田市仁井田緑町4番2号